

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE



vol. 65 2020年7月

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203
nofenceinfo@gmail.com
<http://nofence.jp/>

【強制収容所二題】

清水ハン栄治さんの北朝鮮強制収容所アニメ作品

「TRUE NORTH」が国際映画祭でノミネート

去る6月12日在日の映画監督清水ハン栄治さん制作の北朝鮮の強制収容所を描いたアニメーション作品「TRUE NORTH」が、フランスのアヌシー国際アニメ映画祭の長編作品部門にノミネートされました。日本から北に帰国した在日帰国者がスパイとされ強制収容所に収容され、主人公の少年が過酷な環境の中でヒューマニズムに目覚めていく、逆に収容所の職員の青年が人間性を喪失していく様が、アニメで描かれているそうです。清水さんは北朝鮮の強制収容所の実態を広く世界に知らせ、その廃絶にアニメによる映像化を志し、インドネシアのアニメーターの協力を得て完成に至ったといいます。日本とインドネシアの共同作品。映画祭そのものもオンラインで行われたそうで、今後どのような形の配信、上映になるか未定ということですが、NOFENCEとしても、とてもうれしいことです。清水さんはNOFENCEの宋允復さんともコンタクトを取り、私もお会いしたことがあります。ネットで清水ハン栄治、アニメ、国際映画祭といれ、調べてください。朝日新聞の牧野記者の清水監督のインタビュー記事を参考にしてこのニュースを書きました。

https://news.goo.ne.jp/article/globe_asahi/world/g_あ obe_asahi-13452390.html

中国の強制収容所のドキュメンタリー映画東京で近く上映

「死靈魂」8時間半、一挙上映

世話人の山下誠氏が読売新聞の記事(7月20日)を世話人メールに送って下さり、このニュースを知りました。読売の記事は中国文学者の藤井省三氏の物ですが、中国の王兵(ワンビン)監督制作で、1950年代後半から1960年代前半の「反右派闘争」を

題材にしたもので、中国甘肃省夾辺溝収容所(ゴビ砂漠の中)を中心に沢山の人が囚われ、餓死し、その生存者や家族の証言をもとに作られたドキュメントという。8時間半の大作。

8月1日から14日まで、東京渋谷のシアター・イメージフォーラムという映画館(駅から10分、国連大学までの途中、右入る)で上映。午前11時半から夜8時半迄、途中2回休憩を入れ一挙に上映。料金は3900円。土・日は予約でほぼ満杯。ネットで予約されてると良いとは映画館側(電話03-5766-0114)の助言。地方でも順次上映されるとのこと。まだ未定。

中国の強制収容所の事は、先年亡くなられたハリー・ウー(吳弘達)氏の『労改』や『ピーター・ワインズ』で知られているが、この記録映画は生存者や家族の証言であり、迫力があるという。6月4回にわたって本誌で紹介した北朝鮮内の変革者の証言で、北朝鮮の強制収容所は1956年の8月宗派事件から金日成が作り始めたことを、私たちは知ったが、ちょうどその時期と重なり、北朝鮮の強制収容所理解にも資する事大であると考えます。ウイークデーに観に行って、感想をこの欄で記したいと思います。ナチのホロコーストを扱った映画『ショア』は二日に分けて上映されましたが、今回のは、一日に一挙上映とは。王兵監督は1967年生まれという。

『北朝鮮王朝成立秘史』の著者林隱=許真氏は

八真の一人だった！

—『さらばわが愛、北朝鮮』を観て分かったこと—

2015年に制作された韓国のドキュメンタリー映画『さらばわが愛、北朝鮮』(80分)は、コロナ禍のため、当初の上映から一か月半遅れ、去る6月27日から7月17日まで、都内で上映された。1952年2月朝鮮戦争のさなかにモスクワの映画大学に留学した8人の北朝鮮の青年の生涯を追った記録映画である。この映画の内容は、1956年2月のフルシチョフのスターリン批判演説(スターリンは1953年3月に死去)を契機にして、北朝鮮で始まっていた金日成の個人崇拜化に気づいた八人の青年が、金日成の個人崇拜に反対する旗幟(きし)を掲げ、闡明(せんめい)にしたため、北朝鮮政府から批判され、全員ソ連に亡命したという物語で、とても新鮮で貴重である。北朝鮮の内部において批判した人たちは、金日成によって肅清されていくが、たまたまモスクワにいた八人の青年たちは、望郷の念に駆られつつも、自分たちが知った真実を、北朝鮮の人たちに、また世界に知らせなければならないと結束し、ソ連政府に亡命申請をし、許可を受け、生涯をソ連で生きていくのである。八人が結束するプロセスとその様が素晴らしい。1957年11月27日モスクワで開かれた朝鮮留学生大会で八人の一人許雄培(ホウンペ)氏は金日成批判の演説をした。彼は引きずりおろされ、逃亡するが、自首して北朝鮮大使館に監禁される。そこを脱出して、ソ連政府に亡命を申請する。彼に向調した7人は夜を徹して議論を重ねる。1958年1月22日の彼らの討論のメモが残されていた。この映画のパンフレットにそれが紹介されている(吉野太一郎氏の一文の中に)。

「朝鮮に個人崇拜思想があるか？私はあると思う。個人崇拜思想は憲法と党内民主主義を抹殺することだ。憲法違反だ。党内民主主義はあるか？そもそも映画大学にあるか？ない。1917年にソ連に抗日部隊があったのに、現在は1920年の金日成の部

隊が初の抗日運動とされている。これは金日成を偶像化することだ。ないことを捏造することだ。」(チェ・グギン——最年長)

彼らは退学処分を受け、寮から追い出される。モスクワ郊外のモニノの森でテント生活をし、近くのコルホーズで働きながら、討論を重ねる。そこに許雄培がやってきて、真実を生きるために、みな自分の名を真としようと提案する。一致した八人は八真となる。許雄培は許眞と。この後結束してソ連中央政府に手紙を書き、フルシチヨフの演説を支持し、亡命の申請をする。二か月後に受理され、八人はソ連政府の指示する処で分散生活をするようになる。しかし八人は七つの誓いを立て、一ヶ月に一度はお互いの消息を伝え合うということを実践し、生涯を終える。

私は許眞氏の存在を以前から知っていた。『北朝鮮王朝成立秘史』の著者林隱が許眞氏であり、許雄培が本名であることも。林隱は許雄培の郷里の地名であることも。しかし許眞が八真の一人であることを、このドキュメンタリー映画で初めて知った。許眞の眞の意味を始めて知ったのである。私はこの映画に感謝しても余りある。

この映画は許眞氏のその後の仕事のことに触れていない。許眞氏は1970年代10年をかけて『北朝鮮王朝成立秘史』を執筆してゆく。次に稿を分けて、そのことを記そう。

『北朝鮮王朝成立秘史』は1982年4月に日本で刊行！

許眞氏は1970年代10年を費やして、『北朝鮮王朝成立秘史』という大著の原稿を執筆した。金日成がどの程度の人物であったか、パルチザンとしての能力はどの程度であったか、この一番肝心の所は、1956年当時ソ連駐在の北朝鮮大使李相朝氏(この年ソ連に亡命)ら先輩たちから沢山の話を聞き、可能な限りの本を調べて、解放(1945年8月)前後の朝鮮の共産主義者たち(延安派、ソ連派、パルチザン派、南労派、国内派)、抗日運動の先人たち、朝鮮戦争、そして一番力を入れて調べたのは、金日成が行った数々の肅清の歴史を、叙述し、最後に主体思想と自主性の時代という金日成が最も誇った彼の思想というものが、いかにマルクス・レーニン主義から逸脱したものかを明らかにした。彼はこれを公刊しようか否か随分迷った。しかし1980年10月10日に開かれた第六回朝鮮労働党大会で、「全社会の主体思想化」の決定と金正日がナンバー2に選ばれたのを見て、刊行を決断したという。本書はその1年半後に日本で刊行された。右翼系の本を出していた自由社という出版社からである。

私はこの本の存在を、故磯谷季次氏を通して知った。磯谷氏が原稿の束を持っていて、それをお借りしたら、すべてこの本からの抜き書きであった。金日成を尊敬していた磯谷季次氏は、本書を読んで多大なショックを受け、膨大な抜き書きから一冊本を作ろうとしておられた。私は重複しているところを削り、内容を体系化し、新たな論点も付け加えて、本作りのお手伝いをした。こうしてできたのが磯谷季次氏の最後の本『良き日よ来たれ——北朝鮮民主化への私の遺書——』(花伝社刊)である。

自由社は存在しているようであるが、古書として本書は高い。2千円の定価の物が5千円位する。大きな図書館所蔵の物を見られたい。私自身所蔵しているが、今回再度繙いてみた。本書64頁から75頁にかけて、抗日名将伝が記述されている。私は二人の人物に目を引き付けられた。一人は1942年43歳で戦死した東北抗日パルチザンの許享植という人物。彼はいつも羅貫中の『三国志』と許浚の『東医宝鑑』を持ち歩き、前者は百ペん以上読み、後者は薬の処方に役立てていたという。この教養もさることながら、1940年頃優勢な敵軍の強圧の下で東北抗日パルチザンたちがソ連に避難

せざるを得なくなつた時も(金日成もその一人——引用者)、彼は最後まで自分の戦区を離れることなく、勇敢にたたかい、壮烈な最期を遂げたという。今一人は李紅光という女性戦士である。彼女は素朴な朝鮮の農民であり、勇敢な人物であった。彼女は遊撃隊の隊長に選ばれ、ある夜第二の閻魔大王の名を持つ悪質地主の武装隊を襲って20余丁の優秀な拳銃を奪う様が、描かれていた。彼女も戦死している。許真氏が本書で紹介している抗日パルチザン戦士たちは、金日成のパルチザン闘争よりははるかに厳しく、かつ大きな成果を挙げ、かつ皆戦死している。

本書で許真氏が一番力を入れ、詳細に叙述しているのは、金日成が肅清の天才であるという所である。優秀な人材を片つ端から殺していった人物。そして私自身が反省を持って読まなければならぬところは、自主性の時代という金日成時代の規定と宣伝はマルクス・レーニンの思想と全く切れたところで云々されているという指摘と、主体性や自主性の思想にはそれを担う階級が示されていないという許真氏の指摘である。事実北朝鮮の51成分分類では、労働者や農民は動搖階層に位置づけられ、プロレタリアや貧農が主人公になっていないのが北朝鮮の金日成王朝である。自主性という言葉が如何に魅力的でも、許真氏の指摘は重要である。北半部はソ連軍によって解放されたにもかかわらず、自力で解放したと言い、朝鮮戦争は自分で起こしておきながら、南の侵攻で始まったと真っ赤な嘘をついている金氏一族である。1970年代に北の体制を王朝と名付けた先見性と言い、生命と生涯をかけて書いた畢生の大作の本書を私たちはもっともっと評価しなければならないと今感じている。図書館所蔵の物や所蔵する友人の物を借りて活用してほしい(文責 小川晴久)。



『TRUE NORTH』から



『TRUE NORTH』から